

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 近世における隠元・黄檗宗と日中文化交流

一人・物・葬送儀礼を中心に―

氏 名 楊 慶慶

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は明清の政権交替と江戸時代の「海禁・華夷秩序」体制という日中を取り巻く東アジアの歴史的背景のなかで生み出された日中双方の第一次資料を解読することにより、今まで注目されてきた史的な研究だけでなく、より広い角度から、思想交流や仏教儀礼といった面をも視野に入れつつ、「人」「物」「葬送儀礼」という三つの視点から、日中友好交流の接点としての隠元及び彼が率いた黄檗教団が、近世にあつて、具体的に日本皇室や日本禅界等との間に生じたさまざまな思想・文化面での交流（時としてマイナス面のそれをも含む）に際しての実態を考察した。これまであまり深く知られて来なかった、具体的な側面を明らかにした。その交流の実態について考察することを通じて、日中文化交流史の分野で新たな知見を提示することを目的としている。本論文は計三部に分けた六章からなっている。

第一部では、「人」を中心に、隠元・黄檗宗と日本禅界の交流について考察した。黄檗宗の開立は当時日本禅界を、とりわけ臨済宗を代表する大教団であつた妙心寺と深い関わりを持っている。本部では主に、隠元と黄檗宗開立を促進するキーパーソンである龍溪性潜との関わりを切口として考察することにより、隠元・黄檗宗と妙心寺における親檗派・反檗派との融合・衝突の実態を史的面や思想的面から明らかにした。

第一章では、隠元の生涯、日本渡来の原因及び時代背景、黄檗宗開立の経緯等について考察した。承応3（1654）年、三年後には帰国するという約束で、63歳の隠元は弟子一行とともに長崎へ渡来した。当時、日本仏教界は積極的に外来思想や文化を吸収する気運にあり、隠元の渡来は大きな反響を起こした。当時妙心寺住持の龍溪性潜は隠元を妙心寺に招請する運動を行ったが、妙心寺元老の愚堂東庵らは正法禅を提唱し、妙心寺の伝統である「関山一流相承刹」を守るべく、隠元の受け入れを拒否する。その後、龍溪は隠元を普門寺に迎え、隠元を日本に引き留めるために、自らは何回も江戸に赴いて、幕府当局に対し奔走・要請を重ねた。その結果、隠元は幕府から認められ、京都宇治の寺地を授けられて、黄檗宗を開立した。つまり、妙心寺招請の失敗は、かえって黄檗宗の開立を促進したのである。こうしてみると、龍溪は黄檗山萬福寺開立の偉業を促進するキーパーソン

ンであることが分かる。

第二章では、隠元の黄檗宗開立を支援した龍溪の動機を外在的要因と内在的要因という二面から考察した。これによって、龍溪が自己の妙心寺での経歴に影を落としかねないにもかかわらず、隠元を支援すべくどこまでも尽力した理由を一層明らかにした。さきに第一章では、隠元の妙心寺招請をめぐる、龍溪と愚堂の間に激しい論争があったということを論じたが、この対立は実は、江戸初期の紫衣事件における軟硬両派對立の延長線上にある。龍溪は日本仏教を振興したいという念を持ちながらも、紫衣事件からの影響により、その言行が妙心寺内で受け入れられなくなり、それどころか、しだいに敵視され孤立していくようになった。そのため、紫衣事件は龍溪が隠元を支援したうえでそれなりに影響を与えていたものと推察される。しかし、これは決して龍溪が隠元を支援した主因ではない。龍溪が隠元を支援した重要な要因は、次のようにまとめられる。龍溪は求道心の強い禅僧であり、もともと中国の禅林や禅匠へ憧れていた。龍溪と隠元の間には特別な因縁がある。隠元の渡来前、龍溪は偶然に隠元の語録を読んで、その思想に惹かれ、すでに心の底に隠元への尊崇の気持ちを持つようになっていた。隠元の渡来は龍溪の望みにかなうものであった。一方で、隠元の自由闊達な禅風や持戒主義などの思想に惹かれ、「隠元こそは臨済宗の正系（正宗）を継ぐ者である」という深い崇敬や期待の感情をいだくに至った。日本の臨済宗を振興する志を持っていた龍溪は、隠元による臨済宗の振興を期待した。そのため、誤解や排斥を受けながらも、黄檗宗の開山のために奔走することができた。

第二部では、「物」を中心に、隠元・黄檗宗と日本皇室との交流の実態を考察した。法皇は一生を通じて、一つの宗派に限らず、天台宗、真言宗、浄土宗などの諸宗派の僧侶に帰依した。それでも黄檗宗との縁故は特筆すべきものであり、法皇は実は、その生涯を通じ実際に隠元と面会したことは一度もなかったものの、それでも隠元の嗣法の弟子たる龍溪に帰依したことによって、黄檗の法脈を受け継いだのである。法皇が隠元に仏教のシンボルとしての仏舎利やそれを祀る舎利殿を建てるための費用を喜捨したという点からも、法皇が日ごろいかに深く隠元を信頼し、帰依していたかが窺われる。本部では、後水尾法皇と隠元の関わりを取り上げるが、その際、和歌、書簡、詩偈、三平瑞木像などの交流を示す「物」を通じて、二人の深い関わりを考察することにより、法皇が隠元へ帰依した背景や、三平瑞木像が法皇と隠元にとって意味したことを明らかにした。

第三章では、法皇が書いた和歌や隠元の法皇への書簡や隠元の詩偈という第一次資料を取り上げて分析することにより、法皇と隠元の間での思想・感情における内面的な関わりを重点としつつ、法皇が隠元に帰依した背景を明らかにした。和歌を通じて、法皇の仏教信仰の篤いことや仏教によって世俗生活から解脱の境地に至ることを意図することが分かる。隠元から法皇への最初の書簡には、隠元の自由闊達で縦横無礙の境地や「放下身心」という分かりやすい教化手段が認められる。これはとりわけ法皇の心に響き、大きな心の安らぎをもたらしたものである。隠元はこの書簡を通じて、法皇の世間と出世間の両面における尊さを賛美し、かつ、黄檗宗の開立に際し法皇から加えられた外護を感謝しており、隠元のこうした真摯な敬意は、間に立った龍溪の努力もあって、適切に法皇へ伝えられたのである。隠元の物事に捉われない融通無碍の人柄には、包容性のある法皇も親近感を覚えていた。法皇が隠元及び黄檗宗に帰依するに至った背景はもとより複雑であるが、こ

うした内部的な要因にうながされるようにして、隠元との交流を一層求めたものと言えよう。

第四章では、三平瑞木像をめぐる、後水尾法皇と隠元の深い関わりを新たな視点から考察することにより、隠元がこの像を法皇へ献上した意図や法皇がこの像を泉涌寺に安置した理由を明らかにした。三平瑞木像は福建における民間信仰の三平祖師信仰と深い関わりを有している。隠元も三平祖師信仰をいただいている。隠元は本像を念持仏として供養し、自己の日本での弘教が見守られ、祝福されているものと確信していた。そして示寂に先立ち、隠元は自己の法脈を受け継いでいる法皇へ本像を献上している。そこには、中国における臨済宗の正統な法脈（臨済正宗）のみならず、故郷福建ゆかりの三平祖師信仰をも、本像を象徴として日本で綿々と伝承してゆくことを隠元が法皇に期待していたことが窺われよう。本像を受領した法皇は、仏教の復興のために行われた「寛文大造営」の延長線上に、菩提寺の泉涌寺で、新たに宝殿を建立して、本像を安置・供養したのである。隠元の説いた「灯灯相続。万古三平」という中国の民間信仰を、弟子たる法皇自らも日本で受け継いでゆこうという意志をいただいていたのである。

第三章では、史的な面からではなく、先行研究であまり触れられてこなかった思想・感情の面から、文雅の世界における二人の内面的なつながりを考察した。第四章では、法皇は隠元が保持していた故郷の信仰を敬い、その信仰に込められた中国文化を尊敬・保持するという信仰面での伝承を重んじたという点に着目した。その結果、本像への信仰という点からも法皇が隠元に深く帰依していた、ということが改めて証される。

第三部では、黄檗宗の葬送儀礼の特徴及び変遷を考察した。総じていえば、黄檗宗の葬送儀礼は中国禅宗の葬送儀礼を受容しながら、そのうえで独自の特徴を保持している。また、近代まで発展を重ねた過程で、済・洞両宗からの影響をうけていることが分かる。

第五章では、『黄檗清規』『黄檗山内（小）清規』を中心に、黄檗宗の葬送儀礼の特徴を考察することにより、黄檗宗の住持、亡僧、東堂の葬送儀礼のそれぞれの特徴を明らかにした。その結果、中国の『勅修百丈清規』『禅苑清規』を受容しつつも、独自の特徴を保持していることが判明する。例えば、まず住持遷化仏事に見る特徴として、逮夜や七七日における坐禅の重視、「楞嚴呪」の念誦の重視、孝服面での仏教回帰などが挙げられる。また、亡僧の仏事では阿弥陀信仰を濃厚に示しており、この点、住持の仏事と区別していることが認められる。終わりに、東堂の仏事では、黄檗宗の儀礼を特徴づける「香讚」を唱えており、ここに黄檗教団独自の特色が示されている。一方、葬儀では、上下関係がより厳しく規定されている。黄檗宗の葬送儀礼で反映されている隠元とその弟子らが孝・戒律・礼を重視する思想は、明末仏教からの影響を受けている。その一方で、「禅淨兼修」という明末仏教の思潮からも影響を受けている。こうした事象は見落とせないが、それらにもましてやはり坐禅重視という思想こそが、隠元の黄檗禅における一大特徴であると考えられる。なお、儀礼の面で、「香讚」を唱えるという中国近世以降の仏教に独特な儀礼が黄檗教団にも継承され、日本にもたらされた。周知のように、黄檗宗を除く日本仏教諸宗は、中国仏教の儀礼に関しては遅くとも元代までのそれを導入するにとどまっており、明代以降の儀礼を伝えているのは黄檗宗のみである。

第六章では、黄檗宗の葬送儀礼の近世から後代への展開を考えるために、近代の葬送儀礼にも着

目する。本章では、昭和 13（1938）年に刊行された黄檗宗の『津送須知』に説かれた住持の葬送儀礼を中心に、臨濟宗の『小叢林略清規』（無著道忠）、曹洞宗の『洞上僧堂清規行法鈔』（面山瑞方）、『明治校訂洞上行持軌範』の大正期改訂版など、日本在来の二大禅宗（臨濟・曹洞両宗）における住持の葬送儀礼との間で共時的な考察を加えることで、『津送須知』を通じて、近代の黄檗宗における住持の葬送儀礼の特徴や変遷を明らかにした。『津送須知』における住持の葬儀の特徴として、先行する『黄檗清規』や『黄檗山内（小）清規』における逮夜に際し、「伴レ龕坐禅」のような黄檗宗の伝統的な独自の儀式を継承している部分もある。その一方で、奠茶奠湯の仏事を行うことや、建札、津送須知、四門三匝など、明らかに済洞両宗からの、特に曹洞宗からの影響を受けている部分も認められる。その他、「那伽定」の設置、頭巾や頭陀袋などの仏教教理上の意味が提示されていること、さらには位牌や墓標の決められた書き方、住持遷化の当日（三日後ではなく）にいわゆる開蓮忌を行うことなど、『津送須知』特有の点も認められる。さらに臨濟宗では「大悲呪」「楞嚴呪」「往生呪」、曹洞宗では「楞嚴呪」など「呪」類が広く用いられているのに対して、黄檗宗にあっては、『心経』などの経や、いわゆる「三真言」に加え、宗内で製作された「真香讚」「結讚」などの讚が多く諷誦されていることなども認識される。

本部では、黄檗宗の葬送儀礼の特徴や変遷を考察することにより、黄檗宗開立の最初の段階で、日本で黄檗宗の興隆や黄檗派の発展を維持促進するために、明末仏教の特色を帯びた黄檗教団独自の特徴を積極的に守り、発展させようとしていたことが、葬送儀礼を通じて認識される。白隠禅の中興とともに、京都萬福寺の日本人住持も白隠禅を黄檗宗内に導入するようになり、間接的ながら白隠禅の流れに加わった。やがて幕末と明治初期の混乱期を迎え、黄檗宗は江戸幕府からの経済面での支持をも失い、全体的に凋落を避け難くなった。明治維新後、黄檗宗は新たな布教教化を模索したが、とりわけ、葬儀を通しての布教、宗派としての在り方を模索するに至った。その過程を通じ、日本仏教の要素を取り入れて、日本的なものへと変容していく傾向も見られる。